

宮城県民生活協同組合理事  
みやぎ生活協同組合理事

## 外尾 幸子

【ほかお さちこ】

---

- 1933(昭和8)年 10月8日 三重県久居市  
(現津市)に生まれる
- 1956(昭和31)年 結婚、仙台へ移住
- 1963(昭和38)年 子ども文庫活動、新日本婦人の会  
活動に取り組む
- 1970(昭和45)年 宮城県民生協八木山店開店準備  
活動に取り組む
- 1971(昭和46)年 宮城県民生協理事
- 1982(昭和57)年 みやぎ生協理事
- 1999(平成11)年 8月20日死去

知縁のグループ活動と  
多様な組合員活動に道を拓く

## 八木山店出店に向けて活動を開始

外尾幸子が、イエール大学に留学していた夫・健一とともにアメリカから帰国したのは一九六三（昭和三八）年の初頭だった。

自宅のある八木山は、二人が不在にしていた二、三年のあいだに開発が進み、原生林を拓いて造成した宅地に瀟洒な家が建ち並び始めていた。ただ太平洋を望む見晴らしと長閑な雰囲気は、五年前にこの地に自宅を建てたころと変わりなかった。

明治大学法学部出身で、聡明な光を宿した美貌と穏やかななかにも芯の通った人柄は、大勢の人を惹きつけ、「幸子さん」と親しまれた。本稿でも姓ではなく名で呼ばせてもらおう。

新興住宅地へと変貌を遂げる八木山で、幸子は娘の小学校入学等を機に地域の子ども会や子ども文庫、女性・子どもの命を守るための新日本婦人の会の活動に積極的に関わるようになる。仙台市の図書館から児童書や絵本を借りてきて自宅に子ども文庫を開き、新日本婦人の会では八木山班に属して読書会を開催し、仲間とともにさまざまな本を読み合った。

幸子は、給食の安全を守る取り組みを通じて生協運動にも関心に向け、昭和四五年に創立されたばかりの宮城県民生活協同組合（以下県民生協）で家庭班のまとめ役を引き受けていた。

ある日、幸子はいつもバイクで共同購入の牛乳を配達に来る青年のあらたまった訪問を受ける。東北大生協から県民生協を立ち上げ、初代専務理事に就いた内館晟だった。

当時県民生協は第一号店の多賀城店をようやく軌道に乗せ、第二号店の八木山出店を決めてその準備に掛かっていたところだった。出店には地域の組合員をまとめる理事がいなければならない。内館は、幸子の夫・健一が東北大生協の第三代理事長であり、面識もあつたことから、幸子に県民生協の理事就任を依頼する。幸子の答えはイエスだった。

八木山は昭和三〇年代後半から四〇年代にかけて東北放送の建物や東北工業大学のキャンパス、八木山動物園などが次々と完成し、広々とした丘陵地に新しいまちづくりへの期待が高まっていた。

「このまちに自分たちの手で生協のお店をつくらう」

幸子は仲間たちと一緒に家庭班をつくり行動を開始した。このとき、地域名を冠して名付けた「松波一班」は県民生協初の家庭班として語り継がれることになる。

出店の旗は掲げたものの、創立一年にも満たない県民生協は知名度がまったく無く、そもそも生協の仕組みもよく知られていない。幸子たちは、地域に組合員を増やすための訪問活動や生協の活動を知らせるための班会開催に熱心に取り組んだ。

生協の組合員は出資者であると同時に店舗を利用し、運営に参加する一員であるこ

と、生協は平和でより良い暮らしを協同の力で実現していこうとする団体であること、安全で安心な商品を提供すること、組合員からの出資金で店舗をつくること。

幸子たちの奮闘の甲斐があり昭和四六年六月九日、県民生協第二の店舗となる八木山店が開店した。小さいながら和室の組合員集会所も設置された。近くには開校したばかりの八木山小学校があつて、一緒に街のにぎわいを生み出していた。

八木山店開店の前に開かれた県民生協の総代会で理事に選ばれた幸子は、いっそう生協の活動に力を注ぐようになる。

## 出資・利用・運営参加の道をつくる

出店準備活動は、家庭班づくりと共同購入の推奨も同時に行なわれた。

共同購入では、班員は毎週注文書を記入して配達日に届いた商品を分配する、班長は注文書を配布して取りまとめ、集金も行なう。「手間ひまのかかる作業だけど、そこがコミュニケーションの場になり、商品や暮らしについて学ぶ機会にもなるんです」。幸子たちはそう言って、家庭班を拡大していった。

生協の看板はCO・OP商品（以下コープ商品）や独自に選んだ安全・安心な商品、地元宮城の農家から届く産直品だった。とくに共同購入は生協が独自に選んだ商品の占める割合が多く、組合員の関心を引いた。

当時は加工食品が大量に流通し始めた時期で、<sup>〃</sup>真つ赤なウインナー<sup>〃</sup>や<sup>〃</sup>漂白した小麦粉のパン<sup>〃</sup>など不要な食品添加物を使用した食品であふれていた。有害な人口甘味料チクロは使用禁止になっていたが、製品回収されず市場に出回っていた。この状況を懸念し、警鐘を鳴らしたのが日本生活協同組合連合会（以下日本生協連）で、不必要な食品添加物の排除を目指して無漂白小麦粉や無着色タラコなど安全・安心な商品開発を進め、コープ商品として提供していた。

利用を薦める以上、なぜその商品を県民生協が提供するのか、なぜコープ商品は安全・安心なのか、理解してもらえよう説明しなければならぬ。幸子は以前から取り組んでいた有害食品問題に加えて日本生協連のコープ商品についても勉強し、班会や班長会で広めていった。

班長会に出たある組合員はそのときの驚きを『外尾幸子遺稿・追悼集 幸せを運んでくれた人』に記している。

― 学生時代有用な添加物として必死で憶えた科学合成品が、立場を変えようと、命を育み、維持するための食べ物の安全性を阻害していることを教わり、ショックでした。生協運動への導入でした。―

一口一〇〇円の出資金積立活動では、元銀行員の経歴を持つ友人のアイデアで、組合員ひとり一人に「出資金積立カード」を作成し、増資のたびにそこへ二〇〇円、三〇〇円と記入していった。パソコンなど無い時代、二〇〇〇人から三〇〇〇〇人の

カードに組合員の名前と出資金の額をいちいち書き入れていくのは、随分と根気のいる作業だったろう。

幸子たちの活動は、図らずも組合員活動の基本である「出資・利用・運営参加」を目に見えるかたちで展開することになったのだった。

## 商品研究、産直、家計簿と広がる活動

組合員活動を担う理事の一人として幸子はいつも先頭に立ち、新しいことへ挑戦していった。

八木山店開店の二ヶ月後には、家庭班拡大の際に学んだコープ商品についてさらに調査・学習を進めようと「商品研究グループ」をつくる。

沢庵漬けや福神漬けから採った液で白い毛糸を染め上げる合成着色料の実験、水環境と安全性に配慮したコープの洗剤の使用テスト、保存料や殺菌料、酸化防止剤など食品添加物の学習。それは真剣ななかにも、理科の実験のような楽しさや学ぶことの喜びを味わえる集いとなって、県民生協が南小泉店、西多賀店、高砂店と新しく店舗をつくるたびに仲間を増やす原動力となった。

幸子は、商品活動の専門委員を務めた日本生協連で「商品の外尾」と呼ばれていたという。幸子の活動領域は決して商品研究だけに限るものではなかったが、その体系

だった知識と論理的な思考は他の人から見てもやはり顕著だったのだろう。

夏休みには親子向けの仙台卸売市場見学会を企画。商品そのものだけでなく流通過程にも眼を向ける機会を提供した。

また安全性が高く美味しい地場野菜を手に入れるため、八木山店の仲間と産直グループをつくって角田市の野田集落と交流を開始した。組合員たちが野田を訪れて田植えをし、野田で採れた野菜は八木山の神社や広場で産直市を開いて販売した。

県民生協はすでに角田市農協（現J Aみやぎ仙南）と鶏卵や豚肉の産直を始めていたが、組合員が直接産地を訪問することで、「顔とくらしの見える産直」の意味が生産者にも組合員にもより明確に分かるようになった。

また家計簿グループをつくり、景気や物価、税や社会保障と暮らしについての学習を始めた。昭和五三年に日本生協連の全国統一版の「生協の家計簿」が発行されてからは、暮らしの現状をデータで示すための家計集計活動や、生協利用しらべなど活動は一層活発になり、幸子は県民生協の家計活動のリーダーとして、また日本生協連の全国家計専門委員として活躍した。

## グループ活動から生まれた知縁のネットワーク

幸子たちの生み出したグループ活動は、のちに共通の価値観でつながる「知縁」へ

と発展していく。

みやぎ生協の元理事長で八木山出店準備活動のころから幸子を知る齋藤昭子は、幸子が遺していったものの大きさをこう語る。

「『地縁』で築いた家庭班はコミュニケーションの場となって豊かな組合員活動をもたらしました。そこに幸子さんたちが、趣味や社会的関心事などの『知縁』によるグループ活動を導入した。時代の変化とともに働き方やコミュニケーションのかたちが変わることで、家庭班のあり方も変わってきました。いまは家庭班だけでなく、趣味や文化、スポーツなどの『知縁』でコミュニケーションが図られ、そこから平和や福祉などの委員会、多様なサークル活動も生まれました。そういう意味では、幸子さんたちがつくった数々のグループ活動が、現在のみやぎ生協の組合員活動の母体になったと言ってもいいかも知れません」

幸子が生協活動に入るきっかけをつくった内館辰は、やはり『外尾幸子遺稿・追悼集 幸せを運んでくれた人』のなかで、次のように幸子の功績を讃えている。

「みやぎ生協が店舗中心の事業でありながら、組合員の活動においても、共同購入を主体とした事業を行なっている全国の生協と比べても遜色ない活動を行ない得ているのは、幸子さんを始めとする先達者が、班を中心とする立派な組合員活動の原則をつくって、その伝統を守り育ててきたからです。――

昭和五七年三月、県民生協と宮城県学校生協の合併でみやぎ生協が誕生し、幸子は



みやぎ生協理事に就任する。

合併と同時に組合員活動も統合が図られ、幸子は家計簿集計の一体化などグループ活動の再編に取り組む。六月四日には、日本の生協代表団の一員として第二回国連軍縮特別会議に参加するため渡米し、英語力を活かして同行の仲間を支えながら無事大任を果たす。

幸子が理事を務めた昭和四六年から六〇年までの一四年間は、無名でスタートした宮城県民生協が、地域社会に根付くため必死で坂道を上り続けた時期でもあった。

その間に組合員数は三四〇〇人から二〇万人へ、供給高は二億三〇〇〇万円から四〇〇億円へと発展を遂げていた。共同購入ではOCR用紙による注文から配達・引き落としのシステム整備が進み、組合員証はカード化された。手書きで「出資金積立カード」をつくっていたころと比べたら隔世の感があったことだろう。

幸子は理事を引退したあとも、食の安全の専門委員会や平和グループなどに参加し、後進の指導にあたる。

学習会などでははっきりと自分の考えを発言するが、ふだんはおっとりとして明るく、胸に深い哀しみを抱えていても、穏やかな笑みを絶やさないひとだったという。

「たとえるならば女優の吉永小百合さんのような人でした」と齋藤が言う。

「人を惹きつける魅力があって、音楽や料理、旅行、生花と生活を愉しみ、生活の質を豊かにするとはどういうことかを実際に学ばせてもらいました」

活動のなかで多くの幸子ファンが生まれ、その思いを引き継いだ者たちの手でみやぎ生協の組合員活動はいまも豊かな枝葉を広げている。